

看護力再開発講習会における技術演習コース開催の成果とその意義 ～受講生のアンケート調査より～

キーワード：潜在看護職 技術演習 再就職支援 有効な支援の特徴

毛利聖子、栗原保子、坂井謙次、勝野絵梨奈、日高真美子、武田千穂（宮崎県立看護大学）

I はじめに

わが国の保健・医療ニーズに応えるためには、2025年には約200万人の看護職を確保することが必要だと推計されており、養成数の増加、ワークライフバランスの充実強化、潜在看護職の復職支援等、施策的な取組が積極的に行われている。特に、潜在看護職の復職支援については、約71万人と推計されている潜在看護職者¹⁾に対し、看護職の定着と確保にかかわる取組を担っているナースセンター^{註1)}の役割を強化する法案^{註2)}も検討されているところである。そして、多様な復職支援研修プログラムが実施されている。千葉大学では、平成19年度から「訪問看護師として再就職者を支援する学び直しプログラム開発」と称し、訪問看護師の再就職支援を行っている²⁾。この取組は、国の在宅ケア推進の政策により、24時間体制の訪問看護が期待されており、質的・量的確保が重要な課題となる中開催されている。このプログラムでは、各受講者の学習・職業経験をもとに蓄積した知識の系統的な整理・統合、さらに最新の在宅看護の知識・技術とその基盤を補強、そして、訪問看護師に必要な知識・技術としてフィジカルアセスメント、コミュニケーション力の強化を意図し、訪問看護師と連携してケアを提供する病院・介護保険サービスの機能と役割を理解する為の実習を強化した点が特徴である。また修士以上の学位を持つ在宅看護領域の看護系大学教員を各受講者の担当者として配置し、プログラム実施担当教員と協力して個別支援を強化するなどの試みが行われている³⁾。

そのような背景の中、宮崎県立看護大学（以下「本学」）は、再就職を目指す看護職者への支援を目的に、看護技術の再獲得に焦点を当てた教育研修への取組を始めた。最近における看護についての知識及び技術が修得できるよう、離職中の方を対象にし、職場復帰を容易にするよう支援を行っている。平成23年度からは、公益社団法人宮崎県看護協会と宮崎県立看護大学との共催で講習会のプログラムを展開し、平成25年度には「実習講習」も取り入れられ、現在「Ⅰ講義コース」・「Ⅱ技術演習コース」・「Ⅲ実習講習」とし、より実践的な内容を取り入れた、三段階のプログラムに発展してきている。再就職までのプロセスは様々であると思うが、安全で質の高い医療を提供していく看護職の果たす役割は大きい為、一度現場を離れた看護職者にとっての技術支援は大きな力になると思われる。特に本学では、分野・領域を限らず、幅広く基礎的な技術演習プログラムを設け、領域を

註1) 1992年に「看護師等の人材確保の促進に関する法律」に基づき設置され、47都道府県に必ず一つの都道府県ナースセンターがある。各ナースセンターは、看護協会が知事の指定を受けて、ナースバンク事業・看護の心普及事業・訪問看護支援事業の3つの事業を運営している。また、厚生労働大臣の認可にて看護職員無料職業紹介所を開設している。

註2) 今後ますます増大する看護職へのニーズに対応するために、抜本的な看護職確保対策が必要という観点から、平成25年6月以降、社会保障審議会医療部会において、「看護師等の人材確保の促進に関する法律」改正による、ナースセンターへの看護師免許等保有の届出義務化等の制度改正の検討が進められている。

超えた数多くの教員が参加し、再就職をめざした支援を行っている。そこで本研究では、「技術演習コース」の受講生に終了後アンケート調査を行った結果、その成果と意義が明らかになったので報告する。

II 研究目的

看護力再開発講習会の「技術演習コース」に参加した受講生のアンケート調査より、講習会の成果とその意義を明らかにする。

III 研究方法

1 研究対象

平成 25 年度に、看護力再開発講習会「技術演習コース」を受講し、調査に同意を得た受講生。

2 研究方法

1) データ収集期間：平成 25 年 9 月 10 日～14 日

2) データ収集方法：受講生は自由選択で各単元に参加する為、受講後に無記名によるアンケートを行った。（「技術演習コース」の学習項目単元は、「採血法」・「注射法」・「感染防御」・「急変時の看護」・「情報技術演習」・「移動動作の援助」の 6 単元になる。）

3) 分析方法

(1) 【量的検討】

各学習単元で、「講義・演習内容が役立つ内容だったか」を 4 段階評価（「とてもそう思う、そう思う、あまりそう思わない、そう思わない」）で尋ねたアンケート項目に着目し、単元毎に比較する。

(2) 【質的検討】

各学習単元で提出されたアンケートの自由記述内容から、受講生の再就職支援にどのようなつながっているか、という観点からアンケート結果を見直し、内容の共通性・相異性を吟味しながら「受講生に有効な支援の特徴は何か」という観点から支援の特徴を抽出する。

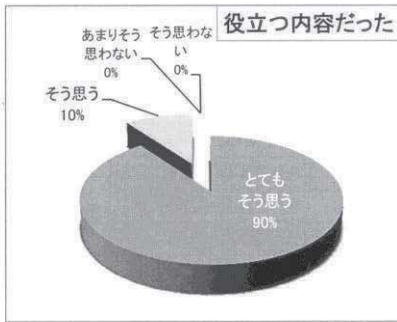
IV 倫理的配慮

本講習会は、公益社団法人宮崎県看護協会ナースセンターとの協働開催である。講習会開催にあたっては、公益社団法人宮崎県看護協会において、講習会の効果的・効率的運営の観点から活用する個人情報に関する取り扱いについて、その内容（目的、方法、収集するデータ等）手続きが承認されている。開催案内文書に、個人情報に関する取り扱いの文言が付記されており、受講申込の時点で同意を得たとみなしている。さらに、ガイダンス時、再度、口頭説明を行い、調査用紙（無記名方式）の回答を持って、同意を得たとした。社会化にあたっては、個人が特定できないよう匿名性の確保に努めた。

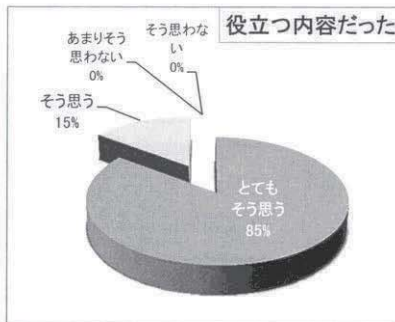
V 結果

調査人数は、学習項目単位によって異なるが 19 名～31 名であった。アンケート内容とその結果は、『平成 25 年度看護力再開発事業報告書』⁴⁾ にまとめられている。

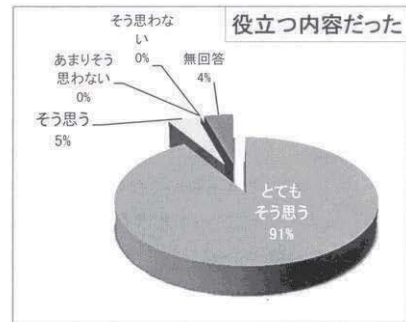
- 1 各単位について、講義演習内容が役立つ内容だったかどうかを尋ね、4 段階（「とてもそう思う、そう思う、あまりそう思わない、そう思わない」）で評価した受講生の調査結果は以下のとおりである。（図 1～6）（『平成 25 年度看護力再開発事業報告書』⁵⁾ より抜粋）



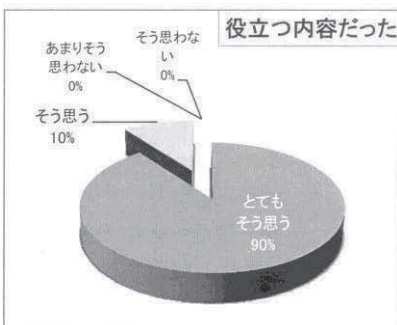
「採血法」(図 1)



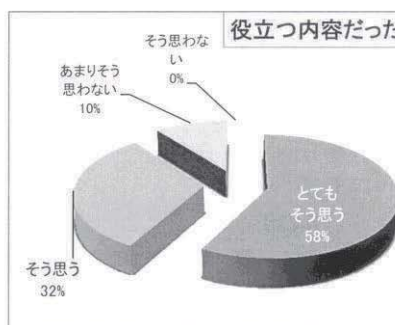
「注射法」(図 2)



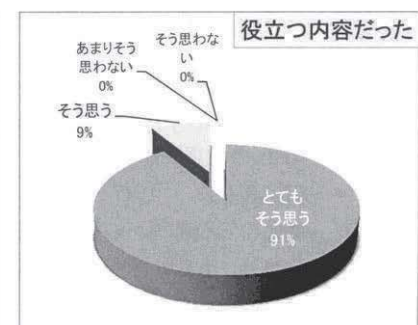
「感染防御」(図 3)



「急変時の看護」(図 4)



「情報技術演習」(図 5)



「移動動作の援助」(図 6)

以上より、「情報技術研究演習」を除いた全ての単位で「とてもそう思う」が 85%を超えている。これは、講義単元の内容が、受講生のニーズに即していたものであったと考えられる。これに対し、「情報技術研究演習」については、「とてもそう思う」が 58%、「そう思う」が 32%に対し、「あまりそう思わない」という回答が 10%であった。しかし、アンケートの内容からは、内容自体は「わかりやすい」が 100%であった。

- 2 各学習単位で提出されたアンケート内容の自由記述から、離職者の再就職支援に有効だと思われる支援の特徴を分析した結果、以下の 6 項目が挙げられた。（表 1）

- 【最新の現場の知識や技術であり根拠があるもの】
- 【基本原理・原則を押さえた技術演習であること】
- 【自分たちの体を通して演習ができる技術であること】
- 【イメージが膨らむ講義・演習であること】
- 【繰り返し行える演習であること】
- 【周囲の環境（講師・支援者・同じ受講生の雰囲気等）がよいこと】

＜ 離職者の再就職支援に有効だと思われる支援の特徴＞ （表 1）

| 自由記述から取り出された共通性の高い記述内容 | 特徴 |
|---|--------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ・「働いていた頃は当たり前だと思っていたことが、今はやっではいけないことになっていて、改めてブランクを感じた。」 ・「感染対策については、とても変わっている部分が多く、興味深く聴講することが出来た。」 ・「科学的根拠に基づいた感染対策について学べた」 ・「(急変の) 前兆は、患者の表現通りに捉えるのではなく、科学的な視点で命と直結する病態ではないか、とフィジカルアセスメントしていくことが重要である」 ・「(急変時の) 迅速評価について、根拠となる知識を深める必要性を感じた」 ・「感染予防にかかるコストと感染が起ってからかかるコストについて、知ることが出来たことは大きな成果だった」 | <p>最新の現場の知識や技術であり根拠があるもの</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> ・「看護技術の意味や必要性をわかりやすく指導してもらい今後の自信につながった」 ・「対象者の状態や療養環境など基本と応用が必要な技術だと感じた。」 ・「自己流で行い腰を痛めた経験があったが、ボディメカニクスの定式に基づいた移動援助を行っていくことが出来るような気がする。」「てこの原理の応用」 ・「健康な場合の基本動作を考えながら、重心を動かしていく援助が安楽な移動につながる。」 ・「対象の基底面に自分の重心を置くことが少ない力で移動させるコツである」 ・「(情報技術演習で学んだ) 現象—表象—表現ののぼり (抽象化)・くだり (具体化) の構造を考慮して、意識して会話してみようと思う」 | <p>基本原理・原則をふまえた講義・演習であること</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> ・「実際に現場に出て行く不安はあるが、採血技術のイメージはついた。」 ・「ビデオは現場をイメージしやすく、講師の話もわかりやすかった。」 | <p>イメージが膨らむ講義・演習であること</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> ・「実際に道具に触ることで、思いだしたこともあり、やはり動いてみることに、やってみることの大切さを感じた」 ・「絶え間ない胸骨圧迫が救命につながることを身をもって実感することができた」 ・「演習をしているうちに、少しずつ勘を取り戻し“復帰できるかも”と思えた」 | <p>自分たちの体を通して演習ができる技術であること</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> ・「物品の違いに戸惑ったが、繰り返し演習することで乗り越えたい」 ・「繰り返し行うことで、(採血の場合) 血管に入った感覚がわかるようになり、一連の行為にも自信がついた」 ・「繰り返し演習できて、自信につながったように感じた」 ・「心肺蘇生法は理解できたが、思った通りに体が動かなかったので繰り返しトレーニングが必要だと痛感した」 ・「繰り返し練習することで少しずつ手技も上達した」 ・「演習で手洗いを繰り返したことで正しい方法がわかった。」 | <p>繰り返し行える演習であること</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> ・「グループでの演習は、知っていることを教え合い、指導されたことを共有することで知識が深まった。」 ・「同じ不安や考えを持つ人たちとの交流や講師からの言葉に救われることも多く、参加してよかった。」 ・「講師・支援者がとても聞きやすい雰囲気よかった。」 ・「講師や支援者にたくさんの質問に答えてもらい、良い実習になった。」 ・「熱意ある質問がたくさんあり、それにより気づかされたことは大きい。」 ・「講師の看護観が見える場面も多く、“自分の手に患者への思いが表現され伝わっていく”という言葉には感動した。」 | <p>周囲の環境（講師・支援者・同じ受講生の雰囲気等）がよいこと</p> |

VI 考察

1 技術演習コースの成果について

1) 各学習單元について

各学習單元は、現場で活用頻度の高い技術單元を選択し構成している為、離職者の学習内容としてはニーズが高いものであったといえる。潜在看護職者の復帰支援講習会へのニーズを調査した研究においても、採血・輸液・注射、感染予防、IT 関連（オーダーリング）、心肺蘇生などの、本コースと同様の内容が、希望する研修内容として挙げられていた⁶⁾。これらの多くは、診療行為に直結する技術であり、身体侵襲も大きい技術である為に、受講生の不安を軽減することに繋がったであろうと考える。しかし情報技術研究演習については、役立つかどうかという問いに対し、他の單元に比べやや低い傾向にあった。これは、受講生がキーボード操作を苦手としていること、具体的なパソコンを使って模擬入力実演をイメージしていたことに対し、「情報とは」という概念からの講義内容であったため、期待する内容とは異なっていた為の差異であろうと推察される。又「講義コース」と内容の重複が見られたことや、他の看護技術とは性質が異なり、直接対象者への援助技術とは異なることもその一つではないかと考えられる。しかしアンケート内容の自由記述からは、「病気や気持ちは記録だけではなく、自分の目で確かめていくことの大切さを大事にしたい」や「人の考えや価値観は様々であるので、そのことを理解し情報共有してケアに望むこと」などがみられた。つまりこのことは、技術的・操作的なことを指しているのではなく、情報をどのように捉えるのか、扱っていくのか、という情報の概念の本質的な内容を掴むことが出来たことを意味しているといえる。また、現在様々な電子カルテ等の医療情報技術が導入され、変化のスピードが速い中で、柔軟に対応できる力もつくものと思われ、意味があったと考えられた。

しかし、受講生は病院などの施設に就職するだけでなく、訪問看護や地域の診療所など他領域に及ぶため、直接対象者への援助技術の單元を増やしていくことも必要だと考えられた。そこで、平成 26 年度は、実践の現場で活用頻度が高い技術演習を考え、「誤嚥性肺炎を予防するための口腔ケアと吸引」について開講することを考えている。

2) 受講生にとって有効な支援の特徴について

受講者にとって有効な支援の特徴を見てみると、【最新の知識・実践技術を知り根拠があるもの】という特徴は、なかなか知ること見ることのできない現場の様子を感じ取り、新たなイメージを拓け、次に向かうための一歩を踏み出す勇気を得られているものと思われた。一度離職した者にとっては、離職期間が長いと不安も大きく、医療現場の進歩と現在の自分とのギャップを感じてしまう。まずは、この落差を埋めていく事で、安心して前に進める要素を増やし、再就職支援に向けた支援につながるのではないかと思う。しかし、最新の知識・技術だけを獲得する事だけが離職者の支援につながるのではなく、【原理・原則をふまえた講義・演習であること】が有効であることが見えてきた。即戦力が期待される現場では、原理原則は不要なのでは、という疑問も挙がるかもしれない。この点において薄井は、「技術とは、本来人間が対象と取り組む中で、対象と自己の関係において発見した法則性にそって、からだの動きをつくり出したものである。したがって、看護技術を学ぶ時には、すでに解明されている法則性をしっかりと自分の頭脳に刻み込み、その法則性に導かれながらからだを動かすという学習方法に徹することである。それが技術上達のコ

ツである」⁷⁾と述べている。時代と共に、道具や手段は次々と変わっていくが、原理・原則を押さえていることで、時代は変わり対象は変わっても、個別に応用しながら実践できる力が身についていくのではないかと考えられる。特に離職者にとって、昔学んだ技術はもう使えないのではと落胆したり、驚きやギャップを感じることもある中で、原理原則を学び直すことによって、勘やコツを取り戻しながら昔の技術とのつながりや違いを確認して再修得することは、より確かで早い技術修得の近道であると考えられる。これは、これまでの自分自身のキャリアや自負心を全て否定するのではなく（一度は否定することもあるものの）、原理原則を再獲得し、最新の技術と向き合うことで、手順行為に向きがちなところから、より次の段階へと発展させることができるのではないかと考えられた。そして、【講義や演習でイメージがふくらみ】、【自分たちの体を通し】、【繰り返し演習を行う】ことで、上達していることも見えてきた。本コースでは、自己学習を5日間の内の4日間設け、本学の教員と看護協会のスタッフが支援を行っている。看護技術のイメージを作った頭で、体を通して、繰り返し演習ができるように、物品の準備を整え会場を設定していることも大きな力になっているであろう。また【周囲の環境（講師・支援者・同じ受講生の雰囲気等）がよいこと】は、講義や演習中の受講生のつぶやきや戸惑いをキャッチしながら声をかけ、繰り返しの刺激を行いながら、学外講師と受講生をつなぎながら演習を支援している支援者の力が大きいのではないかと考えられた。特に本学では、県立病院の看護者が3年間の任期で本学に助手としてローテーションする仕組みが整っているために、常に現場での新しい知識や情報が受講生に還元され、受講生の不安や戸惑いの軽減に貢献しているのではないかと考えられる。また、アンケートには表現されなかったが、受講生の位置でモニターや照明、マイクの音量などにも気を付けながら細やかな配慮をしている多くの支援者の応援が、より質の高い支援に繋がっているのではないかと思われた。

以上より、現在の医療現場の実践に即した取組みを、原理原則を基盤に置きながら、体験を通して繰り返し行うことで、看護技術力が向上し再就職支援に繋がる技術演習であると思えてきた。そして以上のことから、現在のプログラムと受講生のニーズは現段階ではほぼ合致していると言えよう。

3) 今後の課題

千葉大学における再就職者を支援するプログラムでは、「講義」・「演習」を終え、「実習」を行った後、受講生自身が必要な知識・技術として希望したものを「補強講義」として取り入れ支援を行っている。たとえば緩和ケアに必要な「疼痛管理における薬理作用」や、在宅人工呼吸器としての「鼻マスクの管理」など、最新の医療機器に関して、機器メーカー技術者による機器の原理および使用方法の講義・演習などである⁸⁾。このように、最新の医療機器について実物に触れ、その器具の取り扱いの実際についての講習を組むことも、プログラムの効果をより高めていくかもしれないと考える。また、潜在看護職者の不安内容を明らかにした研究では、「医療機器の取り扱い」についてが最も高かったという調査結果も見られている⁹⁾ことから、受講生のニーズに即しながらも、その時代に合わせた情報を提供していくことも、今後の課題として大切になると考えられた。また、受講生も支援者も講師も毎年変わる中で、本コースを運営していく為には、受講生の声を参考にしながら、本講習会の目的や支援の在り方をしっかりと支援者に伝えていくことも必要であると考えられた。

4)「技術演習コース」の社会的意義について

現在、潜在看護職者は、全国に 71 万人いるとも言われている¹⁰⁾。一般的に医療施設においては、法改正を受け、新人の教育システムについては整っている。しかし、再就職者の支援について教育システムとして整っているところは少ない。そのような中、本コースの意義は非常に大きく、再就職への支援につながっていると考えられる。小坂は、「看護職者が離職してしまうことや、資格を持っていながら潜在化してしまうことは、その個人、看護界、そして社会にとって大きな損失である」¹¹⁾という。だからこそ、「再就職するにあたって障壁になる、医療の進歩による変化や未経験の看護領域について、学び直す機会を得ることが必要と考える」¹²⁾と述べている。再就職に向けた多くの人の一歩に向けた支援を行っていくことが、個人にとっても社会にとっても発展につながっていくであろう。

VII おわりに

受講生が最終日に「一歩踏み出せそうな気がする」とつぶやいていた言葉が印象に残った。長く離れていた医療の現場に戻ってもう一度看護したい、という受講生の気持ちを支援していくことこそ、支援メンバーの「源」になっていると思われる。今後も本講習会のプログラムの評価を行いながら取り組んでいくつもりである。

引用文献

- 1) <http://www.kango-renmei.gr.jp/news/2967/>
- 2) 吉本照子他：平成 21 年度文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」委託事業：訪問看護師として再就職した看護職者を支援する学び直しプログラム開発，千葉大学看護学部紀要第 32 号 2010.03
- 3) 前掲書 2) 49-50
- 4) 宮崎県立看護大学、公益社団法人宮崎県看護協会：平成 25 年度看護力再開発事業報告書，22-35
- 5) 前掲書 4)
- 6) 塩原真弓他：A 県における潜在看護職者の現状と復帰支援講習会へのニーズに関する研究，日本看護学会論文集 看護管理 41 号，107,2011
- 7) 薄井坦子：Module 方式による看護方法実習書<第 3 版>，2005 年，現代社，まえがき，1
- 8) 前掲書 2) 51
- 9) 佐久間恵子、大内宏子、渡辺由美子：潜在看護職の再就職への不安内容と就労支援について，日本看護学会論文集 看護総合 39 号，43,2008
- 10) 前掲書 1)
- 11) 小坂直子他：訪問看護士として再就職したい看護職者を支援する学び直しプログラム，看護展望 33 (6)，41,2008
- 12) 前掲書 11)，41